

## コミュニケーション学とSLA(第二言語習得論) の交差点 —Willingness to Communicate—



Tomoko Yashima, Ph.D.  
JCA中部四国支部秋季大会  
December 4, 2016

### SECTION 1

WTCとはどういう概念なのか？  
日本人のコミュニケーションの特徴とWTC

### SECTION 2

日本の英語教育におけるWTC研究  
国際的志向性とWTC

### SECTION 3

L2WTCはどのように伸ばせるか？  
想像のコミュニティへの参加を促す

### SECTION 1

WTCとはどういう概念なのか？  
日本人のコミュニケーションの特徴とWTC

## Willingness to Communicate (WTC)

米国のコミュニケーションの分野で生まれた概念  
コミュニケーションをするかどうか、選択の余地がある場合に  
コミュニケーションをする傾向 (McCroskey & Richmond, 1991)



第二言語分野に導入 (MacIntyre et al., 1998)

*readiness to enter into discourse at a particular time and  
with a specific person or persons, using an L2*

WTCを生み出すことも、言語教育の目的であってもよいのでは？

## 東アジアにおけるWTC 研究

日本人のコミュニケーションの特徴とWTC

- Sato (1982) East Asian ESL students took significantly fewer turns at talk than their non-Asian counterparts.
- Liu, J. (2000) Asian students' silence in American classrooms attributed to multiple factors, e.g. **facework**, proficiency, anxiety, motivation.
- Woodrow (2012) Asian EFL learners show tendency to adopt **performance-avoid goals**.
- Peng (2012, 2014), Peng & Woodrow (2013).  
"If you speak up too much the others will loathe you."

## 東アジアにおけるWTC 研究

- Concern about other students in the classroom. (Liu, 2000; Peng, 2014; Yashima & Ikeda, 2014)
- Wen & Clément (2003) Cultural heritage (other-directedness, submissive way of learning) influences Chinese students' WTC inside the classroom.

→ 集団のなかで、恥をかく、目立つ、自分だけ話す、フロアを独占するなどの行為を嫌う文化的特徴が見られる。

→ WTCに影響

Low WTC/ Silence  
↓  
Non-participation  
Voicelessness

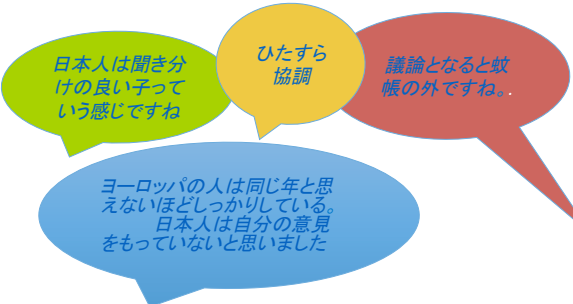




International  
Volunteering

写真提供: 国際教育交換協議会

このコミュニティでの日本人の位置取りは?  
(Yashima, 2010)



日本人は聞き分けの良い子っていう感じですね

ひたすら協調

議論となると蚊帳の外ですね..

ヨーロッパの人は同じ年と思えないほどしっかりしている。日本人は自分の意見をもっていないと思いました

世界に届く声を創るために

- 日本には対話がない (e.g., 北川・平田, 2008)
- 意見が違って当たり前という前提から出発し、(特に人間関係への配慮や力差がある状況で)話し合いを通して違いをすり合わせたり、埋めていこうという強い伝統はない。

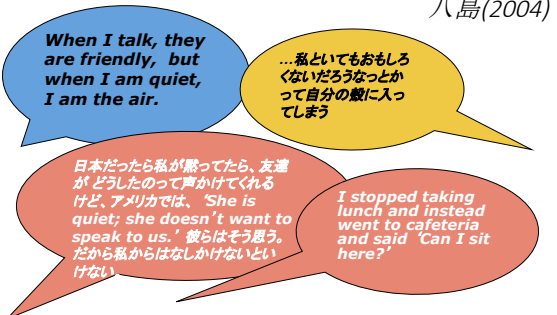
しかし...

- The L2 may create a dialogic space that is different from the L1 space.
- だからこそ L2 WTC...
- Creating voices that reach the world (Yashima, 2015).

なぜ日本の英語教育にWTCが必要?

10

アメリカに滞在する高校生の調査より  
八島(2004)



When I talk, they are friendly, but when I am quiet, I am the air.

...私といてもおもしろくないだろうなとかって自分の殻に入ってしまう

日本だったら私が黙ってたら、友達はどうしたのって声かけてくれるけど、アメリカでは、'She is quiet; she doesn't want to speak to us.' 彼らはそう思う。だから私からはなしかけないといけない

I stopped taking lunch and instead went to cafeteria and said 'Can I sit here?'

待っていても話かけてもらうことが期待出来ない状況で、英語で自らコミュニケーションを開始する積極性をもつことが、ホストとの対人関係のきっかけを作る上で重要であった。

なぜ日本の英語教育にWTCが必要?

- SLA の観点から  
L2 を発達させるには、output として使う必要がある (Izumi, 2003; Swain, 2005)。ことばはコミュニケーションを通して習得される (Ellis & Larsen-Freeman, 2009; Tomasello, 2003)。
- 国際コミュニケーションの観点から  
教室を出ると、L2 を使う機会は自動的に生じない。(e.g., Norton, 2000; Yashima et al. 2004)

世界に届く声を創るために、英語のWTCが必要

SECTION 2

日本の英語教育におけるWTC研究  
国際的志向性とWTC

13

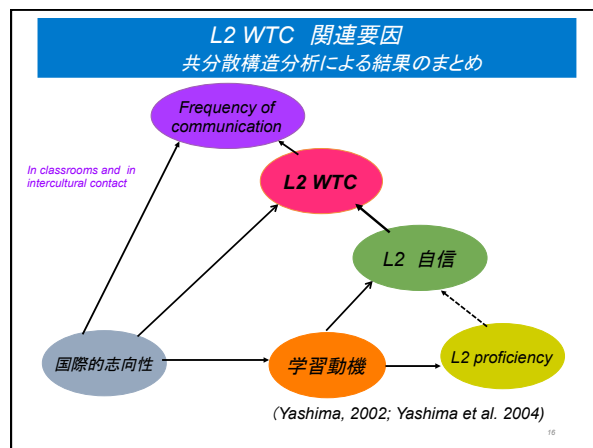
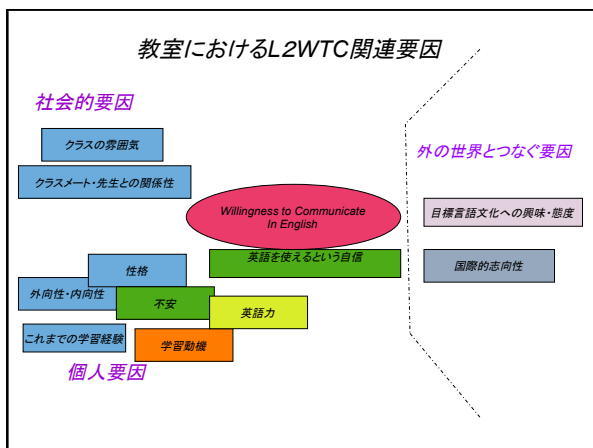
### 日本の教室の現状

EFL で、沈黙は 常態 (King 2013)  
attractor state

- King (2013): 48 時間の授業観察  
学習者が自ら開始したコミュニケーションの時間は？  
→ 7 分, or 0.24% (質問の答えとしての発話: 150分 5.21%)

Silence as “a robust trend, with minimal variation, toward silence” or “a semi-permanent and relatively predictable attractor state” in Japanese EFL classrooms (King, 2013, p. 12-13)

14



### 国際的志向性 (International Posture)

- 統合的動機(Integrative motivation) (vs. 道具的) Gardner (1985)  
目標言語文化に対する興味、その文化の成員とコミュニケーションを図ろうとする傾向、その文化の人になりたいという気持ち (identification) から外国語を学習する動機

→

国際語としての英語の学習にあてはまりがよい概念として

- 国際的志向性 (Yashima, 2002)  
統合的 + 道具的

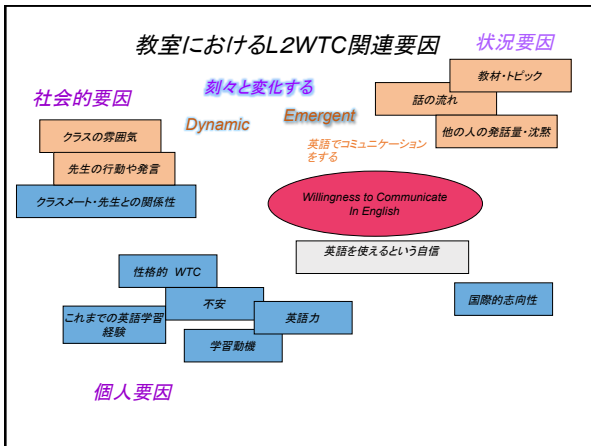
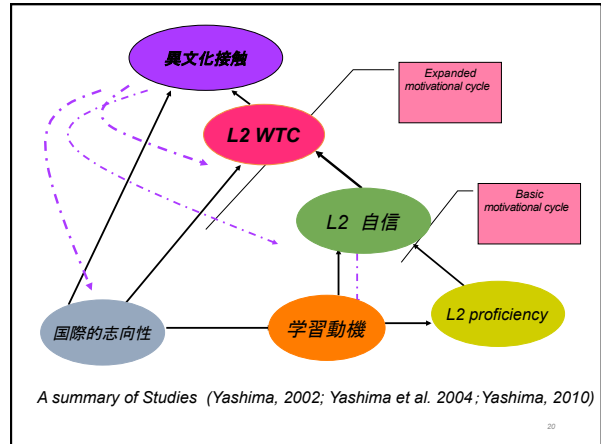
### 国際的志向性 International Posture

- ▶自分とどんな意味で異なる人々とコミュニケーションをしたいと思うかどうか？
- ▶文化背景の違う人々に対して開放的な態度をもっているか？
- ▶世界で起こっている様々な事項に興味があるか？
- ▶日本の外に出て、働いたり活動したいと思うか？

**国際的志向性** International Posture  
(Yashima et al. 2004)

Yashima et al. (2004)では、異文化間コミュニケーションや社会心理学の研究を基盤にし、以下のように3つの側面から操作的に定義した。(20項目)

- 1) 異文化背景を持った人への接近・回避傾向  
例) 隣に外国人が越してきたら困ったと思う。
- 2) 国際的な職業や活動への興味  
例) 海外出張が多い仕事は避けたいと思う
- 3) 国際問題への関心  
例) よく海外のニュースを見たり、記事を読んだりする。



SECTION 3

L2WTCはどのように伸ばせるか？  
想像のコミュニティへの参加を促す

想像の国際コミュニティへの参加を通して  
WTC, 国際的志向性を伸ばし、  
ideal L2 selfを創る試み: 模擬国連



### Some thematic Units in Global Studies covered at Kyoto Gaidai Nishi High School

3 <sup>rd</sup> Year	Model United Nations		War and Peace
2 <sup>nd</sup> Year	Global Issues (e.g., Health, Education, Foreign Affairs, Art)		
1 <sup>st</sup> Year	Me & My World	Folk Tales and Legends	Overseas seminar

25

### 模擬国連プロジェクト概要

- 人権問題(子供の労働・子供の戦闘参加など)について議論をし、決議を採択することを目的とする
- 3~4ヶ月の間、授業において準備、代表する国の観点からトピックについての調査を行う
- Delegate speechの準備
- 前もってネット上で議論をし、決議原案を作成
- セッション当日議論を通して修正案を提案
- 自分の国の利害がもっとも良く反映される形の決議を探る

### 模擬国連セッション と scaffolding

いろいろな足場が架けられた活動

- ◆ 役割分担——様々なレベルの生徒が、それぞれ違った役割で参加
- ◆ 各国2人~4人で1つの国を代表することにより、異なったタイプの生徒が協力
- ◆ セッションにおける形式化した言語表現の頻用
- ◆ 発言権を得るための明確なルール

多くのコミュニケーションチャネル

- ◆ メモで意見や質問を送るなど、多次元のチャネルでの交渉
- ◆ 日本語での舞台裏での交渉、コーカシングなどにおける日本語使用



+ 仕掛け役としての教師の全行程にわたる scaffolding

### Power of imagination

*When they write a sentence in preparation for the MUN, they are not just writing a grammatically correct sentence; rather they are making a delegate speech in the UN session.*



26

### Study 1

Yashima & Zemuk-Nishide (2008)



### 方法

#### 参加者

■ 2種類のカリキュラムを履修する165人の高校生

■ 相対的にコンテンツ・ベースクラスを多く履修するプログラムと、入試対応の文法・スキルクラスを多く履修するプログラムの2つのオプション

## 方法

### ■質問紙と英語標準テスト

**Pre-test** (Time 1, 1年の春) その2年半後

**Post-test** (Time 2, 3年の秋)

## 分析と結果

■参加者全体として、英語標準テストの成績、国際的志向性、コミュニケーションの頻度が有意に上昇

■クラスタ分析により、発達のプロフィールが異なる3グループに収束

■この3グループと一年間留学したグループとを比較した。

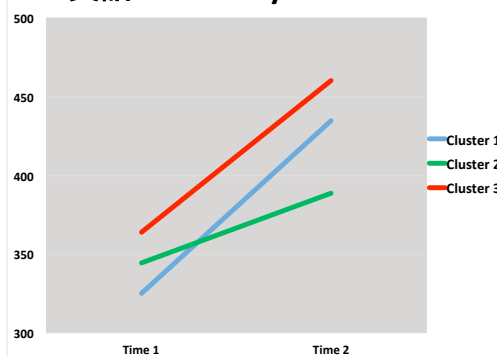
## 3クラスタのプロフィール

*Cluster 1: Characterized by a large gain in proficiency but not much gain in international posture or frequency of communication*

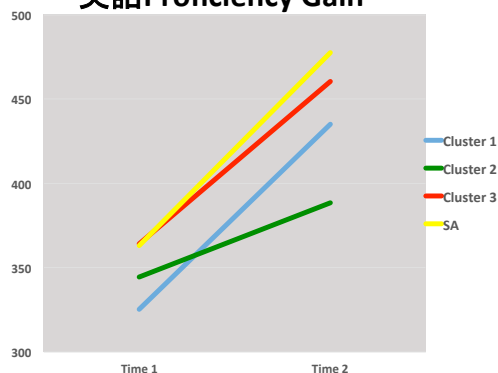
*Cluster 2: Characterized by the smallest gain in proficiency and no gain in international posture or frequency of communication*

*Cluster 3: Characterized by a large gain in proficiency, international posture and frequency of communication*

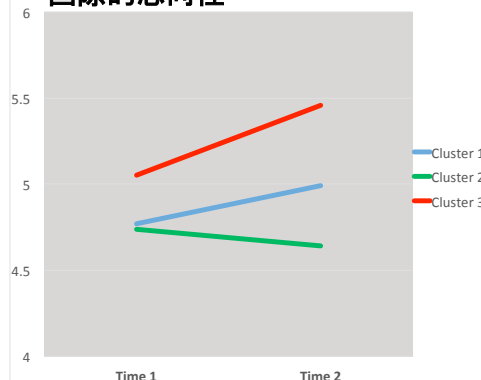
## 英語Proficiency Gain

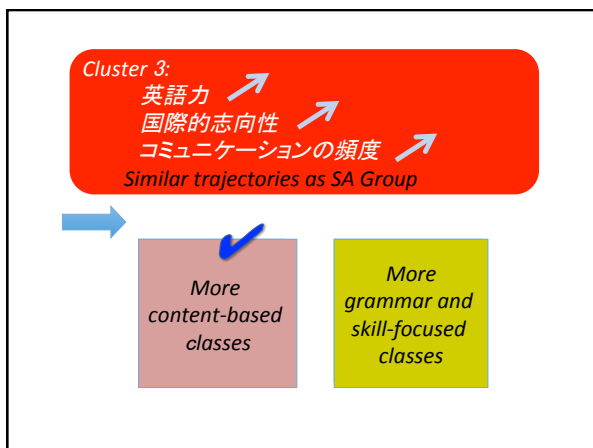
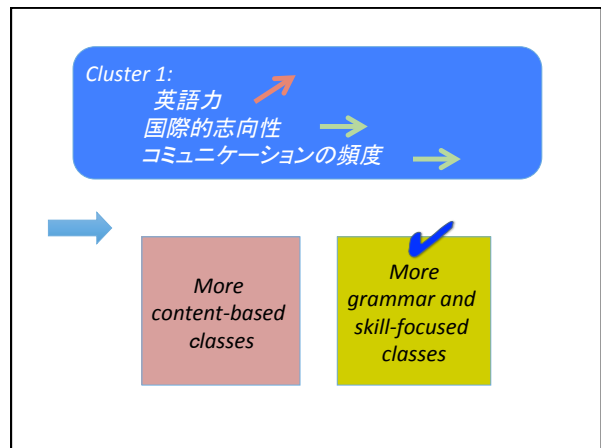
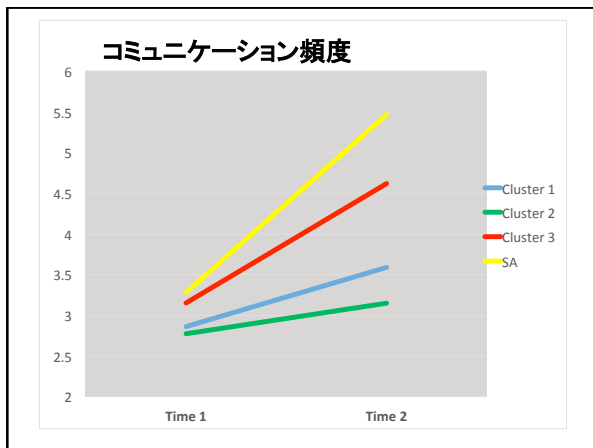
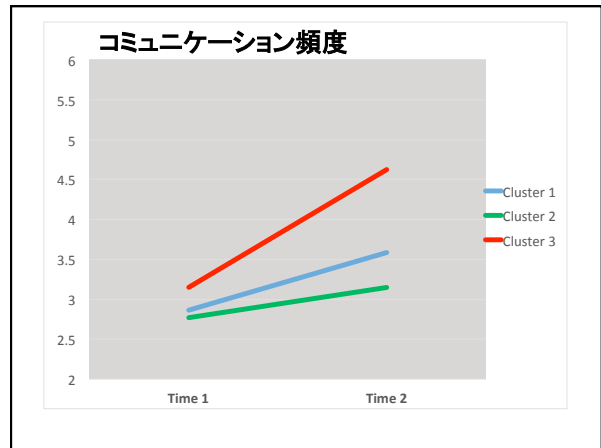
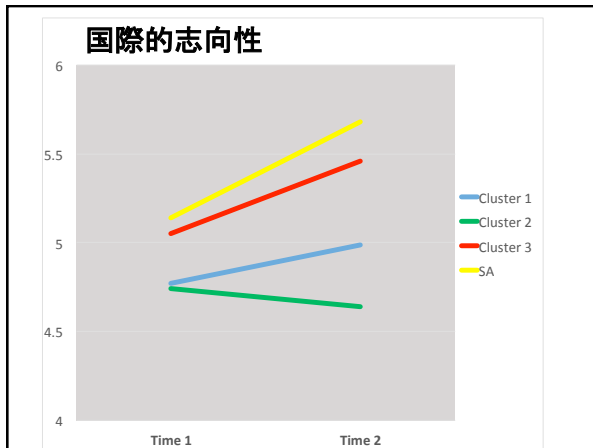


## 英語Proficiency Gain



## 国際的志向性





### Study 2

個人の学びと理想自己 (Ideal L2 selves) に注目して (Yashima, 2014)

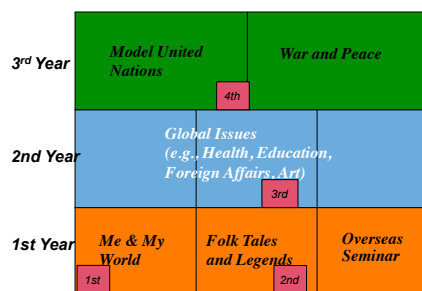
## 方法

高校生活3年間に4度

■ 様々な英語習熟度の7人の学生を面接した。

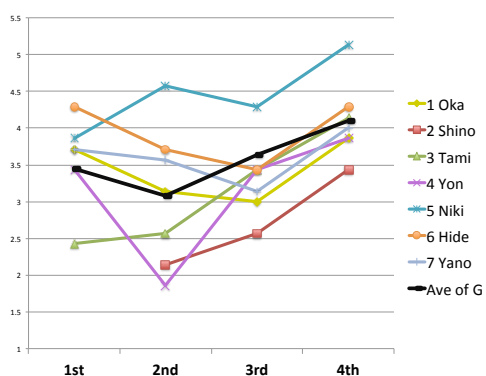
■ 同時に質問紙の回答を求めた。

## 面接時期



44

## 7人の動機付けの変化



## Hide 4th interview

英語を使う人としてのアイデンティティの確認

英語が薄れていったんですよ、普通の学校の科目として勉強するようになっていた... それでMUNに行って、やっぱり英語って自分にとってちょっと違うなって思ってた。好きやったらやらないかんと思っただ。もっとうまくなりたいと思っただ。ディベートとかも初めてやった。もう一回こういうのやりたいなって思っただ。

## Hide 4th interview

友人に見る理想自己 (ideal L2 self)

自分は結構しゃべれるようになってきたと思っただるところで、まだ上のレベルの人がいっぱいいるってことがわかって、こんなにもなれるし、逆にこんなすごいやつが高校生の中にいるにんやて知って、自分のレベルアップにつながる意欲になっただ。自分が言っただいことを英語にできなかつただという悔しさとかもあつただし、負けたくないというのもあるし。

## Niki 4th interview

意見の交換・視点の統合から得られる真の楽しさ

英語で自分の意見を言っただ、また相手の意見も聞きながら、自分の意見を考えなおしつつも主張するっていうか、英語ディベートすることにすごい楽しみを感じました。  
自分の国(インド)のこととかで。。今までずっと時間かけて調べてきてるから、それを相手にどうやって伝えられるかっていう。向こうも向こうの意見があるから、お互い対立してても全然あかんから、それを同時に考えて、でもその国のことを配慮しつつも、どうするかって考えるのが楽しかった。  
あんなに大きい舞台であんなに自分の意思を強く主張することはなかつただです。



## Yon 4<sup>th</sup> interview

多様化するキャリアオプション, 将来のビジョン

MUNをやってから、MUNを調べる過程でアフリカの難民の子とか全部見て、NGOとかNPOに興味がありました。キャビンアテンダントとかオフィスレディとかになりたかったけど。海外協力隊にも参加してみたいなって思う。

MUN行って、先進国と発展途上国の関わり？.....その関わりがわかって、私は先進国にいるし、じゃあ助けなあかんのちゃう？って思ったし。その同時期に映画もみたんですよ。こなくなるしでたのに私は何もしらなかったし、力になれるんやったらならなあかんなって。

## 想像のコミュニティへの参加 学習者のWTCを変化させるもの

- コミュニケーションを心から楽しめる状況がある real sense of joy of communicating
- 意見を交換し、異なった視点を統合することで、新たな知を軸ぎ出す活動に参加する喜びを経験する excitement from integrating perspectives

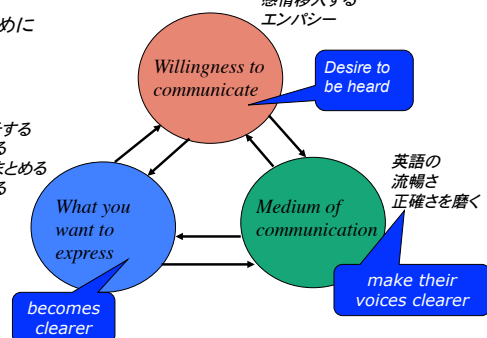


- 英語を使う自己像の明確化

...expand their identity, that is, their relationship to the world, and possibilities for the future (Norton, 2000)

世界に届く声を  
養うために

リサーチする  
分析する  
考えをまとめる  
議論する



## 引用文献

- ◆ Ellis, N. & Larsen-Freeman, D. (Eds.). (2009). Language as a complex adaptive system. *Language Learning*, Special Issued, 59, Supplement 1.
- ◆ Izumi, S. (2003). Comprehension and production processes in second language learning: In search of the psycholinguistic rationale of the Output Hypothesis. *Applied Linguistics*, 24, 168-196.
- ◆ King, J. (2013) Silence in the second language classrooms of Japanese universities. *Applied Linguistics*, 34, 325-343.
- ◆ 北川達夫・平田オリザ (2008) 日本には対話がない 東京:三省堂
- ◆ Liu, J. (2000). Factors affecting Asian graduate students' classroom participation models in their content courses in a US university. *Journal of Asian Pacific Communication*, 9, 1-22.
- ◆ MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., Noels, K. A. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- ◆ McCroskey, J. C., & Richmond, V. P. (1991). Willingness to communicate: A cognitive view. In M. Both-Butterfield (Ed.), *Communication, cognition and anxiety* (pp.19-44). Newbury Park, CA: Sage.
- ◆ Norton, B. (2000) *Identity and language learning: Gender, ethnicity, and educational change*. London: Longman.

- ◆ Ryan, S. (2008). The ideal selves of Japanese learners of English. PhD dissertation, University of Nottingham.
- ◆ Swain, M. (2005). Three functions of output in second language learning. In G. Cook, & B. Seidlhofer (Eds.), *Principles and practices in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford: Oxford University Press.
- ◆ Peng, J. (2012). Towards an ecological understanding of willingness to communicate in EFL classrooms in China. *System*, 40, 203-213.
- ◆ Peng, J. (2014). Willingness to communicate inside the EFL classroom: An ecological perspective. *Bristol: Multilingual Matters*.
- ◆ Peng, J., & Woodrow, L. (2010). Willingness to communicate in English: A model in the Chinese EFL classroom context. *Language Learning*, 60, 834-876.
- ◆ Sato, C. J. (1982). Ethnic styles in classroom discourse. In Hines, M. & Rutherford, W. (Eds.) *On TESOL 81*, pp.11-24.
- ◆ Wen, W. P., & Clément, R. (2003). A Chinese conceptualization of willingness to communicate in ESL. *Language, Culture, and Curriculum*, 16, 18-38.
- ◆ Tomasello, M. (2003). *Constructing a language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- ◆ Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 55-66.

- ◆ 八島智子 (2004). 『第二言語コミュニケーションと異文化適応: 国際的対人関係の構築をめざして』 東京: 多賀出版
- ◆ Yashima, T. (2010). The effects of international volunteer work experiences on intercultural competence of Japanese youth. *International Journal of Intercultural Relations*, 34, 268-282.
- ◆ Yashima, T. (2015). *Imagined L2 selves and motivation to communicate*. Plenary Speech. JALT 2015, 41<sup>st</sup> Annual International Conference on Language Teaching and Educational Materials Exhibition. Nov. 22, 2015, Shizuoka Convention & Arts Center "Granship," Shizuoka, Japan.
- ◆ Yashima, T. & Zenuk-Nishide, L. (2008). The impact of learning contexts on proficiency, attitudes, and L2 communication: Creating an imagined interantional community. *System*, 36, 566-585.
- ◆ Yashima, T. Zenuk-Nishide, L., Shimizu, K. (2004). The influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication. *Language Learning*, 54, 119-152.
- ◆ Woodrow, L. (2012). *Goal orientations: Three perspectives on motivation goal orientations*. In Mercer, S., Ryan, S., Williams, M. (Eds.) *Psychology for language learning*. Hampshire, UK: Palgrave Macmillan.